

平成 19 年度（第 51 回）
岩手県教育研究発表会発表資料

授業改善

授業改善を図るための校内授業研究の 進め方に関する研究

—「校内授業研究の進め方ガイドブック」の
作成と活用をととして—

研究協力校

奥州市立水沢小学校
紫波町立紫波第三中学校

研究協力員

北上市立鬼柳小学校	教諭	松本	祥子
一関市立中里小学校	教諭	叶内	博行
紫波町立紫波第三中学校	教諭	熊谷	啓子
県立釜石南高等学校	教諭	目時	一哉

平成 20 年 1 月 8 日
岩手県立総合教育センター
教科領域教育室・情報教育室
夏井 敬雄 松葉 覚
鈴木 敏彦 谷木 啓恭

《目 次》

I 研究目的	1
II 研究の方向性	1
III 研究の年次計画	1
IV 本年度の研究内容与方法	1
V 研究結果の分析と考察	2
1 授業改善を図るための校内授業研究の進め方に関する基本的な考え方	2
(1) 「技術的実践」と「反省的実践」の二つの視点による授業研究の推進	2
(2) 学校全体と教師個人の二つの側面による校内授業研究の推進	2
(3) 「技術的実践」と「反省的実践」の二つの視点, 及び学校全体と教師個人の二つの 側面による校内授業研究を推進するための主な手立て	3
(4) 校内授業研究の推進の仕方	4
(5) 「校内授業研究の進め方ガイドブック」について	6
2 本研究の基本的な考え方を取り入れた実践について	6
(1) 研究協力校及び研究協力員における実践内容	6
(2) 研究協力校及び研究協力員における実践概要	7
3 アンケート調査の分析と考察	11
(1) 調査の目的と内容	11
(2) 調査結果の分析と考察	11
4 「校内授業研究の進め方ガイドブック」の作成	17
(1) ガイドブック（試案）修正・改善の視点	17
(2) 「校内授業研究の進め方ガイドブック」の作成	18
5 授業改善を図るための校内授業研究の進め方に関する研究のまとめ	18
(1) ワークショップ型研究の実践から	18
(2) 「授業力アップ・ポートフォリオ」の取組から	18
VI 研究のまとめ	19
1 研究の成果	19
2 今後の課題	20

<おわりに>

【引用文献】

【参考文献】

I 研究目的

本県の教育の最重要課題である「学力向上」のためには、日々の授業が児童生徒にとって「わかる授業」となるよう、教員が力量を磨き授業改善に努めることが何よりも大切であり、そのためには、研修・研究の充実が必要である。特に各校で校内研修として取り組む授業研究は、児童生徒の実態に即して、日常的、継続的に授業改善に取り組むうえで、大変有効である。

本県でも、小・中学校を中心に、校内授業研究が盛んに行われており、教員の授業改善の力を高める場となっている。しかし、近年、授業研究会が感想の交流に終始したり、研究テーマに基づいた実証授業がその場限りで日常の教育活動に反映されなかったりして、授業改善につながらないなど、校内授業研究が十分に機能しなくなっている状況が見受けられる。

このような状況を改善するためには、各校の実態に応じた校内授業研究の進め方の視点を示したり、そこで活用できるシートを作成し活用を図ったりするなど、評価・分析の視点を明確にした具体的な授業の振り返りができるようにし、そこで得た気づきを授業改善につなげていくようにする必要がある。

そこで、この研究は、「校内授業研究の進め方ガイドブック」の作成と活用をとおして、教員が授業の評価・分析を協力しながら行う校内授業研究の進め方について明らかにし、授業改善に役立てようとするものである。

II 研究の方向性

教師一人一人が授業改善を図るための校内授業研究は、どうあればよいのかということについて明らかにし、校内授業研究の進め方の視点や具体的な方策、留意点等についてまとめる。それらを実践をとおして吟味・検討し「校内授業研究の進め方ガイドブック」として提示することとする。

III 研究の年次計画

1 第1年次（平成18年度）

- (1) 授業改善を図る校内授業研究の進め方についての基本構想の立案
- (2) 「校内授業研究の進め方ガイドブック（試案）」の作成

2 第2年次（平成19年度）

- (1) 研究協力校における校内授業研究の改善にかかわる実践
- (2) 実践結果の分析・考察
- (3) 「校内授業研究の進め方ガイドブック」の作成
- (4) 研究のまとめ

IV 本年度の研究内容与方法

1 目 標

「校内授業研究の進め方ガイドブック（試案）」に基づいた実践を行い、本研究の基本的な考え方の有効性を明らかにするとともに、ガイドブック（試案）に修正・改善を加え「校内授業研究の進め方ガイドブック」として提示する。

2 内容与方法

- (1) 研究協力校・研究協力員における「校内授業研究の進め方ガイドブック（試案）」に基づく実践（実践）

- (2) アンケート調査の分析・考察（質問紙法）
- (3) 「校内授業研究の進め方ガイドブック」の作成（文献法）
- (4) 授業改善を図るための校内授業研究の進め方に関する研究のまとめ

3 研究協力校

奥州市立水沢小学校

紫波町立紫波第三中学校

V 研究結果の分析と考察

1 授業改善を図るための校内授業研究の進め方に関する基本的な考え方

授業改善を図るための校内授業研究の進め方に関する基本的な考え方と、「校内授業研究の進め方ガイドブック（試案）」については、本研究第1年次（平成18年度）で提示した。その概要を以下の(1)～(5)で示す。

(1) 「技術的实践」と「反省的实践」の二つの視点による授業研究の推進

ドナルド・ショーンは、現代の専門家は「活動過程における省察」を原理とする「反省的实践」において専門性を発揮していると主張した。佐藤学（1996）の文献から「反省的实践」について述べた部分を引用する。『技術的实践』が、どんな状況にも有効な科学的な技術と原理を基礎とするのに対して、『反省的实践』は、経験によって培った暗黙知を駆使して問題を省察し、状況と対話しつつ反省的思考（デューイ）を展開して複雑な状況に生起する複合的な問題の解決にクライアント（顧客）と連帯して取り組むという。この『反省的实践』の様式を教育に導入したのが『反省的授業（reflective teaching）』である。『反省的授業』は、授業に関する一般化された科学的原理やプログラムを教室に適用する『技術的实践』としての授業に対抗する概念であり、教室の『出来事』に対する洞察と省察と反省という教師の『実践的認識』を基盤として成立する授業を意味している。」

「反省的实践」と「技術的实践」という視点から、各学校の校内授業研究を見つめる。校内授業研究会において、仮説を具体化した指導が協議的となる場合は、「技術的实践」に当てはまると言えよう。一方、仮説にかかわらない特定場面における特定の子どもについての教師のかかわり方が協議的になる場合があるが、このようなことは「反省的实践」に当てはまると言えよう。「技術的实践」はどの教室にも通用する一般的な技術原理を探究し、「反省的实践」は教室の中で起こった特有の出来事、その場の教師や子どもの活動・経験の意味を探究していくものである。

各学校の校内授業研究会の協議では、「技術的实践」と「反省的实践」の双方が取り上げられている。ただし、各学校は「仮説・検証型」で研究に取り組んでいることが多いため、協議は「技術的实践」の部分がクローズアップされている。また、研究紀要や研究通信等でも「技術的实践」中心にまとめられることが多い。しかし、「技術的实践」としての授業の限界が指摘されていることから、「反省的实践」の視点からの授業の分析・検討、まとめ等が必要である。校内授業研究会の協議を含め授業研究を推進していく際には、「技術的实践」と「反省的实践」の双方の視点をもつことが必要である。

(2) 学校全体と教師個人の二つの側面による校内授業研究の推進

県内の各学校の校内授業研究におけるまとめは、研究紀要として、設定した研究テーマや仮説についてまとめられていることが多い。ところが、教師一人一人の授業改善がどうなされた

のか、また、授業力量がどのように発展したのかについては、ほとんどふれられていない。言い換えると、「技術的実践」についてはまとめられるが、「反省的実践」についてはふれていない状況が多い。一人一人の授業力量や授業改善の「反省的実践」にかかわることは、教師個人にまかされているのである。「反省的実践」について、校内授業研究の中に位置付けられるとともに、計画的に取り扱われ協議され、まとめられていく必要がある。具体的には、校内授業研究会の協議の際に、「技術的実践」の視点から校内研究テーマについての成果と課題を明らかにしていくこと、そして、授業提供者固有の「反省的実践」の成果と課題も明らかにしていくということが考えられる。また、研究紀要と同様に教師個人の「反省的実践」にかかわる成果と課題、課題改善の方向性を明らかにしていく取組の一例として、ポートフォリオ作成によるリフレクションが考えられる。

(3) 「技術的実践」と「反省的実践」の二つの視点、及び学校全体と教師個人の二つの側面による校内授業研究を推進するための主な手立て

前記1の(1)と(2)で述べた、「技術的実践」と「反省的実践」の二つの視点、及び学校全体と教師個人の二つの側面による校内授業研究を推進するための主な手だてとして、本研究では「ワークショップ型研究会」と「授業力アップ・ポートフォリオの取組」を提案する。

ア ワークショップ型研究会について

(ア) ワークショップ型研究会の進め方

ワークショップ型研究会の進め方（一例）を【資料1】に示す。

【資料1】ワークショップ型研究会の進め方（一例）

《事前準備・授業参観》

各自に付箋紙を渡しておく。

参観者は、付箋紙に気付いたことを記入しながら参観する。

《研究会》

1 授業者による提案授業の説明

授業者は、以下のようなことについて述べる。

○校内研究テーマにかかわり、①提案授業で配慮したこと②実際授業を行ってみたいの反省等

○校内研究テーマ以外のことで、①提案授業で配慮したこと②実際授業を行ってみたいの反省等

2 質疑

協議の前に確認しておきたいことについて質問を取る。

3 グループ協議

4～6人程度のグループを構成し、授業を分析し成果と課題を明らかにする。

- ・ワークシート上に各自の付箋紙を貼り出す
 - ・付箋紙の内容によりグループ化し、小見出しを付ける
 - ・グループ化したもの同士の関係を議論し、関係を線や文章で表す
 - ・成果と課題を明らかにする
 - ・課題については、改善の方向性を見出す
- ※授業者は、グループ協議に加わってよい

4 グループ発表

グループごとに話し合った内容を発表し、情報の共有化を図る。

5 全体協議

グループ発表を受け、全体で共通確認すべきことを協議する。

6 各自の振り返り

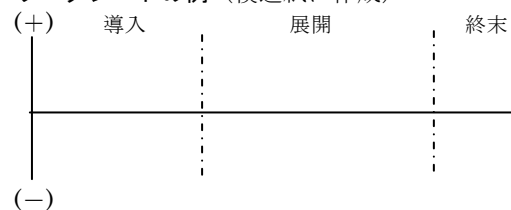
研究会での学びから、各自明日以降の実践に取り入れていきたいこと等を確認する。

付箋紙の色の例

ピンク：研究テーマに関すること

ブルー：それ以外のこと

ワークシートの例（模造紙に作成）



(イ) ワークショップ型研究会により期待できること

- ・自分の考えを付箋紙に記入し、それをもとに協議することから、参加者の研究会への主体的な参加がなされる
- ・小グループでの話し合いは全体での話し合いより気軽にできることから、学び合いの機

会が多くなる

- ・用いる付箋紙の色分けを工夫（例「ピンク：研究テーマに関すること」「ブルー：それ以外のこと」）したり、ワークシートの様式を工夫したりすることにより、「技術的実践」と「反省的実践」のそれぞれについて成果と課題が明確になる
- ・KJ法を用いて、付箋紙をグループ化したり、付箋紙のグループ同士を関係付けたりする過程で、授業の分析・考察が深まる
- ・成果と課題が視覚的にも明確になるとともに、話し合った過程が記録として残る

イ 「授業力アップ・ポートフォリオ」の取組について

(ア) 「授業力アップ・ポートフォリオ」の取り組み方

「授業力アップ・ポートフォリオ」とは、教師が自分の授業力量向上や授業改善を目的として日々の実践に取り組み、それをリフレクションするために取りためた資料等をポートフォリオしたものである。

「授業力アップ・ポートフォリオ」の取組の仕方（一例）を【資料2】に示す。

【資料2】授業力アップ・ポートフォリオの取組の仕方（一例）

《自己課題解決に向けた計画立案》

- ・以下の表の視点や具体的な内容等を参考にし、自分が向上を目指すものを決める。（自己課題の設定）

視 点	具体手的な内容
○教育に対する姿勢	使命感、熱意、教育観等
○授業構想	教材解釈、教材・教具開発、授業計画、評価計画、環境構成等
○学習集団マネジメント	児童・生徒理解、統率力、人間関係構築力、学習意欲の喚起等
○指導法	授業実施に関する技術（発問、板書、学習形態、発言への対応等）、指導と評価の一体化、環境構成等

- ・課題解決がなされた姿を考える（ゴール像の明確化）
- ・課題解決のための方策を考える
- ・課題解決に向けたスケジュールを立てる

《ポートフォリオの作成》

- ・自己の取組をファイルに綴じ込む（パソコン等を利用してデジタルポートフォリオにする方法もあり）

※綴じ込むものの例

- 指導案 □学習プリント □研究会記録 □研究レポート □教材研究メモ □参考文献のコピー
- 研修会資料 □実践についての所感 □授業のビデオや写真 等

※留意点

- ・初めは、どんどん時系列で綴じ込んでいく
- ・途中で、整理する（整理する際は、上記の表の視点等を参考にする）

《シェアリング》

- ・作成したポートフォリオをもちより、学びあったり、助言をもらったりする（学年団で、教科部会で、全校研修会で）

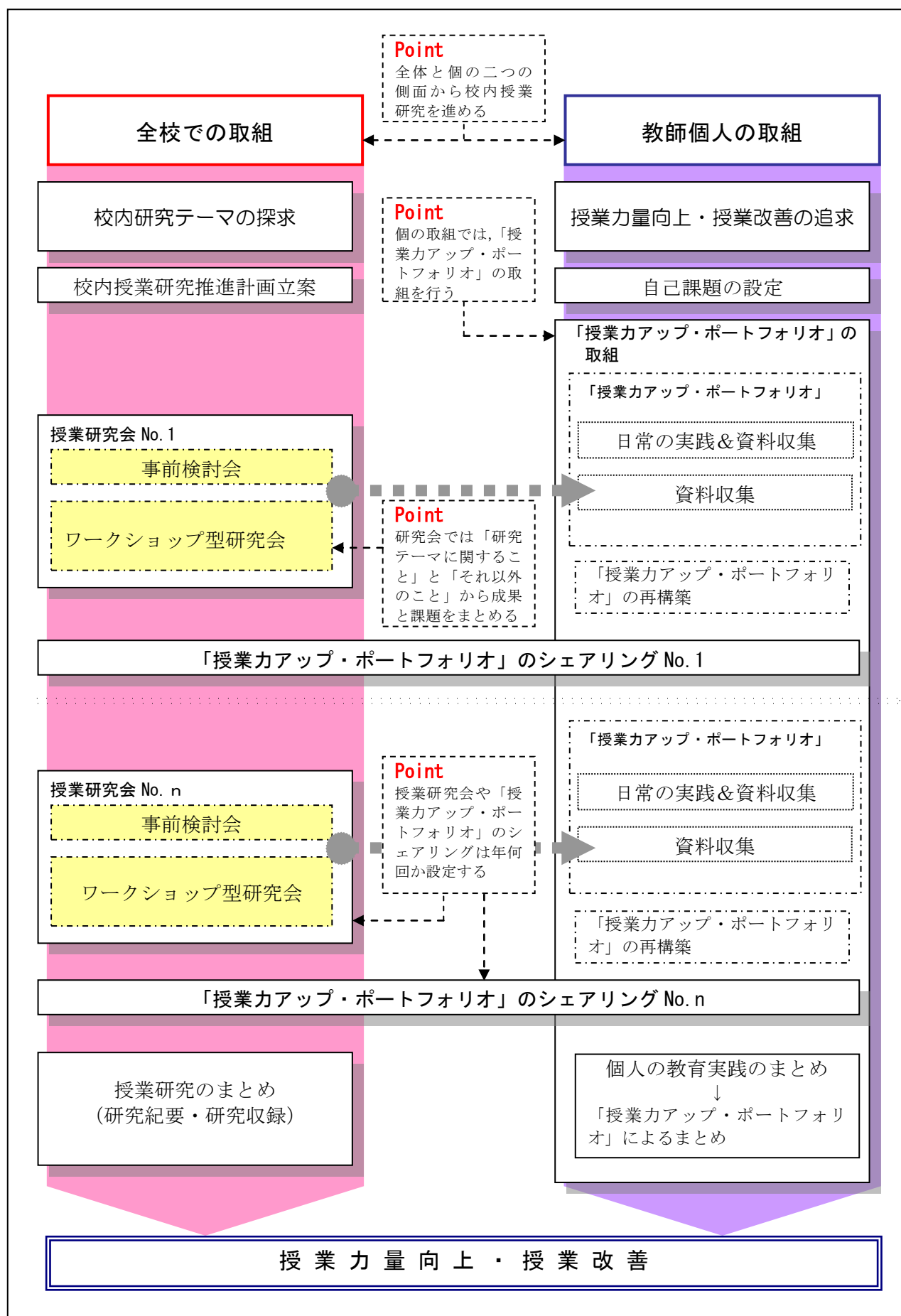
※シェアリングの機会は、定期的に設けるようにする

(イ) 「授業力アップ・ポートフォリオ」の取組で期待できること

- ・自分の授業力量向上や授業改善の足跡を記録として残すことができる
- ・自分の実践についてリフレクションするとともに、同僚同士ポートフォリオを持ち寄ってシェアリングすることにより、授業力量向上・授業改善が図られる
- ・新たな自己課題の設定・その改善に向けた取組がサイクルとなり、授業力量向上・授業改善へ向けた取組が不断になされる

(4) 校内授業研究推進の仕方

「技術的実践」と「反省的実践」の二つの視点、及び学校全体と教師個人の二つの側面による校内授業研究推進の仕方を図に表したものが5頁【図1】である。これは、年間の研究推進例であり、中期的なサイクルモデルである。



【図 1】校内授業研究推進の仕方（中期サイクルモデル）

(5) 「校内授業研究の進め方ガイドブック」について

ア 「校内授業研究の進め方ガイドブック」作成と活用のねらい

「校内授業研究の進め方ガイドブック」（これ以降ガイドブックという）とは、小・中学校、高等学校等のすべての学校を対象とし、教師の授業力量の向上や授業改善を図ることを目的として、校内授業研究の進め方の視点や、校内授業研究会の行い方、そこで活用できるシート等を提示したものである。ガイドブックは、授業研究推進のための一手法の提案という位置付けであり、各学校で、学校種や学校規模、研究の内容等の実態に合わせて内容を取捨選択して活用してもらえばよい。ガイドブックが活用されることにより、各学校の校内授業研究推進のシステムづくりとともに校

内授業研究の活性化、ひいては教師一人一人の授業力量向上・授業改善が図られることをねらう。

本研究の第1年次目にはガイドブック（試案）を作成した。今次は、研究協力校・研究協力員の実践をとおして修正・改善を加えたガイドブックを提示する。

イ ガイドブックの基本構成

本研究の基本的な考え方と参考文献等を基に、ガイドブックは、右の【表1】のような観点と主な内容で構成することとする。

【表1】「校内授業研究の進め方ガイドブック」の基本構成

観 点	主 な 内 容
I 校内授業研究の推進計画の立案	・PDCAサイクルによる研究推進計画 ・自己課題の設定 ・機能的な組織づくり ・校内授業研究推進上の研究主任の役割 ・校外研修への参加 等
II 授業構想の仕方	・授業構想の大まかな流れ ・教材研究の仕方 ・児童・生徒理解の仕方 ・学習指導案の作成 ・指導法について 等
III 校内授業研究会の進め方	・事前検討会の行い方 ・効果的な研究会の行い方（ワークショップ型研究会等） 等
IV 校内授業研究のまとめ方	・研究紀要の作成 ・個人の教育実践のまとめ方（「授業力アップ・ポートフォリオ」） 等
V 資料編	・授業参観チェックシート ・児童生徒による授業の評価 ・自己課題解決シート ・概念化シート 等

2 本研究の基本的な考え方を取り入れた実践について

研究協力校及び研究協力員には、各校の実態に応じてガイドブック（試案）の一端を取り入れた実践をしていただいた。

(1) 研究協力校及び研究協力員における実践内容

【表2】は、研究協力校及び研究協力員における実践の内容を示したものである。

ワークショップ型研究会の実践は、「技術的实践」（校内研究テーマに関すること）と「反省的实践」（それ以外のこと）の二つの視点で協議を行うものである。「授業力アップ・ポートフォリオ」の取組にかかわる実践は、教師個人の授業力量向上・授業改善を図るために行った日々の教育実践の積み重ねである。

【表2】研究協力校及び研究協力員における実践内容

研究協力校及び協力員	主な実践内容	備 考
《研究協力校》 奥州市立水沢小学校 紫波町立紫波第三中学校	・ワークショップ型研究会 ・授業力アップ・ポートフォリオ	・ワークショップ型研究会では、「技術的实践」と「反省的实践」の二つの視点を設けて協議を行う ・個人の側面からの研究推進として、「授業力アップ・ポートフォリオ」の取組を行う ・学校からの要請に応じて、事前研究会・事後研究会に教育センター所員が対応する（資料提供・助言等）
《研究協力員》 小学校教諭2名 高等学校教諭1名	・ワークショップ型研究会	

(2) 研究協力校及び研究協力員における実践概要

ア ワークショップ型研究会の実践概要

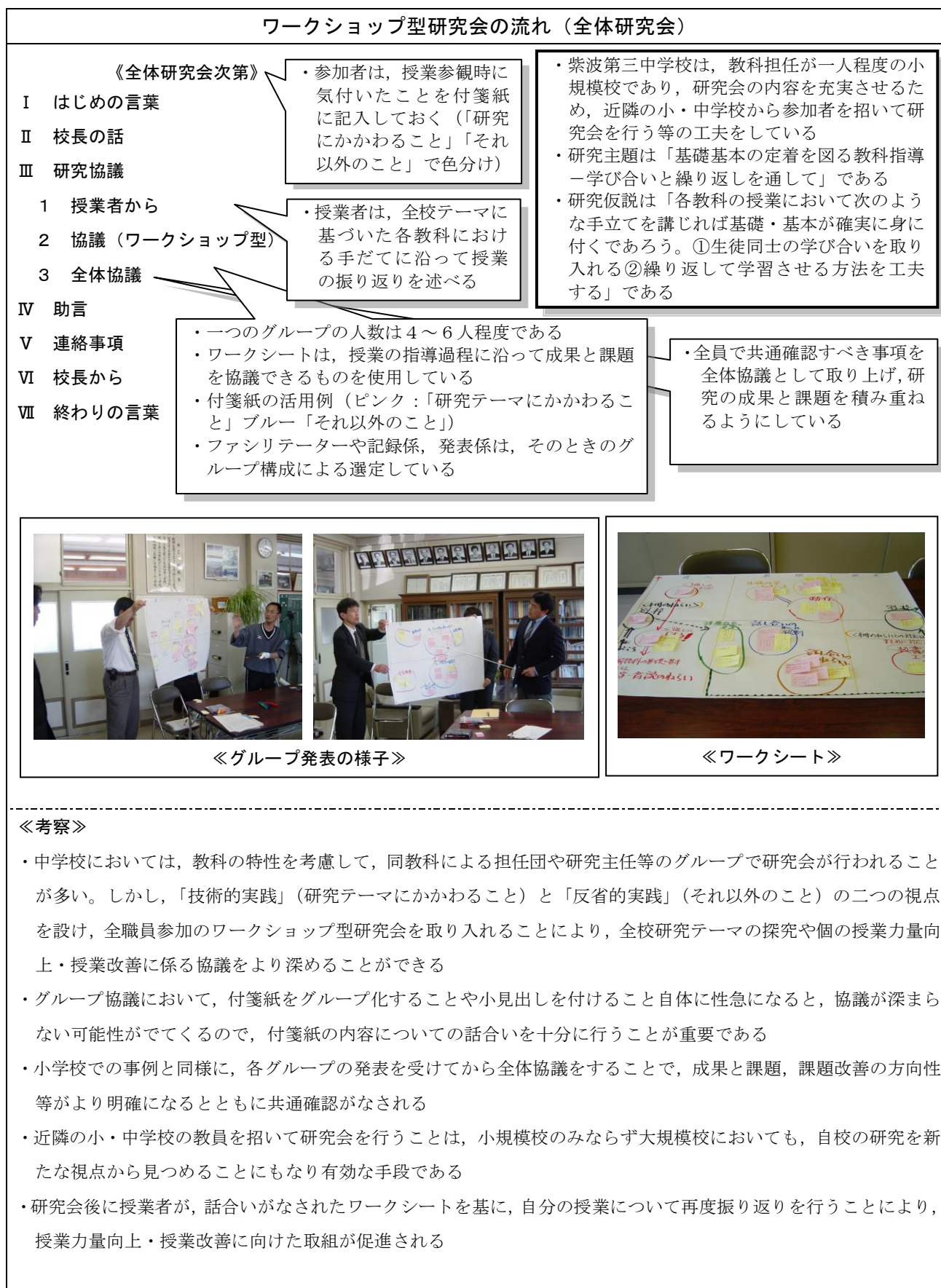
【資料3】は水沢小学校におけるワークショップ型研究会の事例である。

【資料3】ワークショップ型研究会の概要（水沢小学校）

ワークショップ型研究会の流れ（全体研究会）	
《全体研究会次第》 I はじめの言葉 II 校長の話 III 研究協議 1 ○○科研究部会の取組について（○○科部会長）【5分】 ・研究主題について ・手だてについて 2 授業について ・授業者から【5分】 ・質疑【5分】 ・ワークショップ型【35分】 ・全体討議型【30分】 3 指導助言【20分】 4 感想カード記入 IV 校長より V 連絡事項 VI 終わりの言葉	・参加者は、授業参観時に気付いたことを付箋紙に記入しておく（「研究にかかわること」「それ以外のこと」で色分け） ・授業者は、本時授業の視点に沿って振り返りを述べる ・協議に入る前に、確認しておきたいこと等、質疑を行う ・グループ構成は、年代別・所属学年別等、工夫して構成する ・一つのグループの人数は、4～6人程度である ・ワークシートは、研究の手立てに沿って分析できるもの（別冊ガイドブックを参照）を使用することが多い ・ファシリテーターや記録係、発表係は、人材育成の面を考慮して決めることが多い
 《グループ協議の様子》	・水沢小学校では、以下の部会を組織して研究推進している 《主題研究部会》 （国語科，社会科，算数科，理科，特別支援教育） 《プロジェクト部会》 （道徳，音楽，体育，エコ，ICT） ・校内研究会は、全員が参加して行う全体研究会と、各部会が行う部会研究会がある ・各部会で研究主題・研究仮説を設定しており、これまでの取組等を研究部会長が説明する ・ホワイトボードを用意しておき、各グループの発表を成果と課題の視点からまとめていく ・全員で共通確認する事項を研究主任が決め、全員で討議する
	 《全体討議の様子》
《考察》 ・協議の視点や内容により，グループ協議や全体討議の時間配分，進め方等を適宜変更しながら行うことが効率的である ・授業参観前に授業を見る視点を確認しておいたり，研究会の「授業者から」で「技術的实践」と「反省的实践」の二つの視点から授業の振り返りを述べたりすることで，焦点化された協議となる ・グループの人数はあまり多くない方が，一人一人の発言機会が多くなり，学びも深まるとともに満足感も得られる ・グループの構成の仕方を年代別・所属学年別等工夫することで，話し合いの活性化・多様化が望める ・グループで話し合われた内容については，各自がまとめるなどしてポートフォリオしておくことが重要であると思われる ・各グループの発表を受けてから全体討議をすることで，成果と課題，課題改善の方向性等がより明確になるとともに共通確認がなされる ・研究会の終わりに感想カードを記入することにより，研究会での学びが教師一人一人の明日以降の実践につながっていく	

【資料４】は、紫波第三中学校におけるワークショップ型研究会の事例である。

【資料４】ワークショップ型研究会の概要（紫波第三中学校）



【資料5】は、研究協力員が行った釜石南高等学校における地歴・公民科でのワークショップ型研究会の事例である。

【資料5】ワークショップ型研究会の概要（釜石南高等学校）

ワークショップ型研究会の流れ

- ・参加者は、授業参観時に気付いたことを付箋紙に記入しておく
- ブルー：授業のよさ
- イエロー：授業の改善点

《地歴・公民科研究会次第》

I はじめの言葉

II 研究協議

1 教科主任から

- ・研究会の趣旨と流れについて

2 授業者から

- ・授業のねらいについて
- ・授業後の感想について

3 協議（ワークショップ型）

- ・概念化シートによる課題の確認
- ・ブレインストーミングによる協議

4 課題の整理

- ・ワークシートを基に成果と課題の整理
- ・授業者の振り返り

III 連絡事項

IV 終わりの言葉

- ・釜石南高等学校では、教務課が「公開授業」の計画を立て、学校全体で授業を参観し合う体制をつくっている
- ・5月～3月の期間に、月3～4人の授業を公開する計画で進められている
- ・普段の授業を互いに見合うことを前提に、指導案は配布していない
- ・参観者は、「授業参観記入用紙」に所感を記入する
「参観記入用紙」記入の観点
①授業者の話し方・板書②内容・教材の分かりやすさ③授業の開始・終了の挨拶④生徒の取組⑤その他気付いたこと

（ここで示した研究会は、地歴・公民科が行った研究会である）

協議の事前準備

- ・今回初めてワークショップ型研究会に取り組むということで、協議前に参加者が書いた二色の付箋紙を概念化シートに貼り、KJ法の考え方で整理しておいてから協議に入った



《事前準備したワークシート（概念化シート）》

《考察》

- ・授業全体を概観し成果と課題を明確にしていこうとしたとき、今回用いたワークシートの様式（横軸：「教師」「生徒」、縦軸：「プラス面」「マイナス面」の4象限で区切られた概念化シート）は有効なものの一つであると考えられる
- ・今回は付箋紙の類型化等は参会者全員で行わず、協議の前に担当者が行っておいた。研究会が短時間しか確保できない場合や、話し合いの焦点化を図りたい場合等にこの方法は有効であると思われる
- ・研究協力員や研究会参加者より「ワークショップ型研究会は手軽で有効な手法である」との感想を得ていることから、高等学校において授業研究を日常的に定着させる一つの方策として有効であると考えられる
- また、次のような感想も得ていることから、成果と課題を明確にしながらそれを積み重ね、教師の授業力量向上・授業改善を図るための有効な研究会の手法であると考えられる
- 「付箋紙に簡潔に記載することで、プラス・マイナスいずれの感想も率直に表現することができる」
- 「様々な視点からの意見・感想により、これまで行ってきた合評会ではタブー視されてきた部分にもふれられることで、授業者にとってきわめて貴重なものを得ることができる」

イ 「授業力アップ・ポートフォリオ」の取組の概要

【資料6】は、水沢小学校における「授業力アップ・ポートフォリオ」の取組の事例である。

【資料6】「授業力アップ・ポートフォリオ」の取組の概要（水沢小学校）

「授業力アップ・ポートフォリオ」の作成からシェアリングまでの流れ

≪「授業力アップ・ポートフォリオ」の作成≫

I 「自己課題解決シート」の作成

〔自己課題解決シート例〕 ※実物より転記

自己課題解決シート	
名前 ○○ ○○	
【自己の課題】	
① 意欲をもって作文を書くように、題材の提示を工夫すること。	
② 児童がモデル作文からよさを取り出せるように、モデル作文の提示の仕方を工夫する。	
【課題解決がなされたときの姿】	
① 自分の書きたいことを意欲的に表現できる。	
② モデル作文から見つけたよさを自分の作文に生かして書く。	
【具体的な解決策】	
① 意欲をもって書くことのできる作文題材を探し、検討する。	
② モデル作文の2題提示を検証する。	
③ 児童の作文を分析する。	
【簡単なスケジュール 11月～12月】	
月日	課題解決のための取り組み
11月上旬	・作文題材についての資料を集め、研究する。 ・指導の目的に合わせて、リライト教材を作る。
11月中旬	・児童の作文を分析する。
12月上旬	・振り返りをして、まとめる。

II 資料のファイリング

- ・時系列でどんどんファイリングしていく（資料に日付を入れる）
- ・ファイルの最後のポケットに、付箋紙やメモ用紙等を入れておき活用する

III ポートフォリオの再構築

- ・時系列でファイリングしたものを、観点に沿って整理する
- ・資料を振り返って感じたこと・考えたことを、文章や図等に表し新たな資料として綴じ込んでおく（リフレクション）

≪各自の取組のシェアリング≫

IV グループでシェアリングを行う

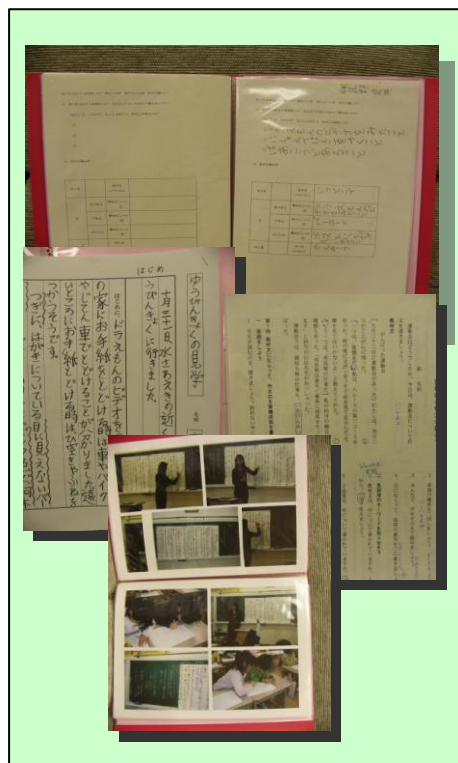
- ・グループの例：教科部会ごと、学年団、教職経験年数を考慮等

V 個人ごとの成果と課題をまとめる

- ・個人ごとの成果と課題を、研究通信で紹介したり、互いのポートフォリオを自由に見ることができるよう保管方法を工夫したりすることで、全体で共有化する

《考察》

- ・目指すゴール像を明確にしたり、取組をより実効性のあるものにしたりするためには、「自己課題解決シート」への記載は、抽象的な書き方ではなく、子どもの姿や教師の活動等を具体的に書くことが重要である
- ・資料はできるだけ一箇所に整理しておいた方が振り返りや活用がしやすいということから、ファイルに直接綴じ込むことができない資料については、写真等に撮ってファイリングしておくといよい
- ・シェアリングのグループが極少数（4人以下）の場合には、作成したポートフォリオを提示しながらでよいが、グループの人数が多い場合には、簡単なレポートを作成しそれを配布してシェアリングした方がよいと思われる
- ・取り組む課題により取組期間は教師ごとによって変わってくるので、シェアリング時には、途中経過のものや完結したもの等様々あってよい



≪ファイリングの様子≫

3 アンケート調査の分析と考察

(1) 調査の目的と内容

本研究の基本的な考え方を取り入れた校内授業研究の進め方についての有効性と、ガイドブック（試案）についての改善の視点を明らかにするために、研究協力校の教員及び研究協力員へのアンケート調査を行った。

アンケート調査の内容と方法、処理・解釈の仕方等は【表3】に、アンケートの設問については【表4】に示すとおりである。

【表3】アンケート調査の内容と方法

調査内容	対 象	調査方法	処理・解釈の仕方
1 「技術的実践」と「反省的实践」の二つの視点による研究推進の有効性	研究協力校の教員 研究協力員	評定尺度及び自由記述の質問紙法（設問1）	記述内容から「校内授業研究の進め方ガイドブック（試案）」の有効性及び改善の視点等について分析・考察する
2 「学校全体」と「教師個人」の二つの側面による研究推進の有効性		評定尺度及び自由記述の質問紙法（設問2）	
3 ワークショップ型研究会の有効性		評定尺度及び自由記述の質問紙法（設問3）	
4 ガイドブックの有効性及び改善点		評定尺度及び自由記述の質問紙法（設問4・5）	
5 授業研究による変容の対象及びその内容		評定尺度及び自由記述の質問紙法（設問6）	

【表4】アンケート調査の設問内容

設問番号	設 問 内 容
1	「技術的実践」（研究テーマに関すること）と、「反省的实践」（研究テーマにかかわらないこと）の二つの視点をもって授業研究を進めたことは、授業力量向上・授業改善を図るために有効であったか。
2	全教職員による校内研究テーマの追究とともに、個人で「授業力アップ・ポートフォリオ」の取組を行ったことは、授業力量向上・授業改善を図るために有効であったか。
3	「ワークショップ型研究会」は、授業研究を推進する上で有効な研究会の方式であったか。
4	校内授業研究を推進する上で、「校内授業研究の進め方ガイドブック（試案）」は、役立ったか。
5	「校内授業研究の進め方ガイドブック（試案）」で、修正・改善を加えた方がよいと思うことは何か。
6	本年度の授業研究をとおして、自分自身や子ども、教職員集団などで変化が見られたことがあるか。

(2) 調査結果の分析と考察

ア 「技術的実践」と「反省的实践」の二つの視点による研究推進の有効性について

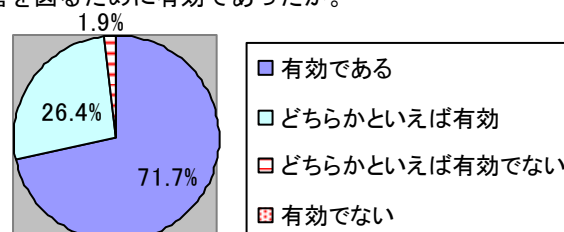
【図2】は、「技術的実践」と「反省的实践」の二つの視点による研究推進の有効性について、その調査結果をまとめたものである。

【設問1】

「技術的実践」（研究テーマに関すること）と、「反省的实践」（研究テーマにかかわらないこと）の二つの視点をもって授業研究を進めたことは、授業力量向上・授業改善を図るために有効であったか。

	人数 (%)
ア 有効である	38 (71.7%)
イ どちらかといえば有効である	14 (26.4%)
ウ どちらかといえば有効でない	1 (1.9%)
エ 有効でない	0 (0%)

※有効回答数=53



【図2】「技術的実践」と「反省的实践」の二つの視点による研究推進の有効性についての回答状況

二つの視点による研究推進の有効性について、プラス回答をしている教員は98.1%である。プラス回答の自由記述から主なものを挙げる。

○授業を観る視点や研究会の視点が明確になる

○研究テーマ以外の部分でも他の先生方の授業の技を学ぶことができた

○授業の基礎となる学級づくり等を見ることも勉強になった

○技術的实践と反省的实践が相互に関連づいてこそ、トータルな授業の力量が向上すると考える

○反省的实践がなかなか共通化・共有化されないという現状を考えると、二つの視点があることが有効であった

○授業力量向上のためには、研究テーマのみならず、教材解釈力、授業の技術力、教材に対する又授業に対する教師の意欲が多大に関ると考える

○従来は研究テーマに関係することと関係しないことが、ごちゃごちゃになりがちだった

自由記述を見てみると、授業力量向上や授業改善を図るためには、「技術的实践」と「反省的实践」の二つの視点からのアプローチの必要性を認識していることが分かる。研究会における協議や日常の教育実践において、この二つの視点を意識して研究推進していくことにより、学校全体や個人の課題の明確化、計画的な研究推進、研究成果の検証等が有効になされ则认为る。

一方、課題として記述されているものは以下のとおりである。

●境界領域の処理に問題を残す

●どれだけ深められたかということには、まだ課題が残る

●反省的实践という語句はよくないと思う。もっとわかりやすいものを使った方がよいと思う

●研究でそういう視点を意識することがなかった

研究会で協議している際、「技術的实践」（自校の研究テーマにかかわること）と「反省的实践」（それ以外のこと）が入り混じってくるということは当然でてくる。この二つの視点は、あくまでも教師の授業力量向上と授業改善を図るという目的達成のための視点であり、協議がそのようななってもかまわない。

研究会は時間が限られていることから、協議事項を焦点化するとともに、話し合いのゴールを設定することが重要である。協議したいことは、教師一人一人によって違ってくるであろう。また、成果と課題を明確にすることをゴールとするのか、課題の改善策まで明確にすることをゴールとするのか、望むところも違ってくるであろう。研究会では、その到達点を参加者が確認していなければならない。共通確認ができていないと、「深められなかった」という思いをもつ参加者がでてくる可能性がある。研究会では、取り上げることができなかった事項について、いつ、どのようなメンバーで、どのような方法をもって今後協議していくのかということについても確認しておく必要がある。

授業研究を推進していく際には、「技術的实践」や「反省的实践」の意味や、この二つの視点により授業研究を推進していくことのよさについて共通理解を図ることが必要である。

イ 「学校全体」と「教師個人」の二つの側面による研究推進の有効性について

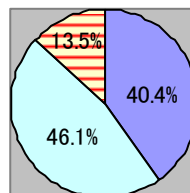
【図3】は、「学校全体」と「教師個人」の二つの側面による研究推進の有効性について、その調査結果をまとめたものである。

【設問2】

全教職員による校内研究テーマの追究とともに、個人で「授業力アップ・ポートフォリオ」の取組を行ったことは、授業力量向上・授業改善を図るために有効であったか。

	人数 (%)
ア 有効である	21 (40.4%)
イ どちらかといえば有効である	24 (46.1%)
ウ どちらかといえば有効でない	7 (13.5%)
エ 有効でない	0 (0%)

※有効回答数=52



■ 有効である
□ どちらかといえば有効
▨ どちらかといえば有効でない
■ 有効でない

【図3】「学校全体」と「教師個人」の二つの側面による研究推進の有効性についての回答状況

二つの側面による研究推進の有効性について、プラス回答をしている教員は 86.5%である。プラス回答の自由記述から主なものを挙げる。

- 資料等をファイルに蓄積していくことで、自分の授業改善を図りやすくなったと思う
- ポイントを明確にして取り組むことで、自分の授業改善が図られる
- 自己課題を追究することで、授業に対しより真摯に臨むことができた
- 目標をもって毎日の授業に取り組むことが、授業を楽しいものにしていくと思うし、授業力アップにもつながると思う
- 研究や実践の記録は意識して行っていないと、せっかくの価値あるものも消えてなくなりがちである。ファイルにしておくことで改善点も見えるし、他職員他教科に広めることもできる
- 大局的・将来的に観たとき、これらの積み重ねこそが授業力向上・授業改善の糧になるのだと確信できる
- 研究会で学んだことや話し合ったことが、その都度途切れずに、次の日からの実践へとつながっていく

これまでの授業研究の課題の一つに、校内研究テーマに基づいた実証授業がその場限りで日常の教育活動に反映されない、ということがあった。研究会での学びを日常実践にいかす上で、「授業力アップ・ポートフォリオ」の取組を行うことは有効な一手段となり得ると思われる。校内研究テーマ以外のことでも個人的に課題を抱えている教員もいることから、日々の実践において自覚的にそのことに取り組みシェアリングしていくことは、授業力量向上・授業改善には欠かせないことであるととらえる。

課題として記述されているものは以下のとおりである。

- 小サイクルでの計画・取組・反省が効果的であると思う
- 研究会としてシェアリングをする場の工夫が必要である
- 時間的に厳しく、取りためたものを見るという時間もなかなか取れないのではないかとも思う
- 普段から研究テーマに沿って学ぶことが多く、それ以上にというのは少し無理がある
- 蓄積したものの分析や活用という点においては全部を使いきれなかった
- うまく資料をファイルすることができなかった。活用も含めできなかった

「授業力アップ・ポートフォリオ」の取組で提案していることは、校内研究テーマとは別の個人課題を必ず設定し、その解決に向けた取組を行っていく、ということではない。校内研究テーマの追究過程で、個人の課題も解決され、授業力量向上や授業改善が図られていくのであればそれでよい。

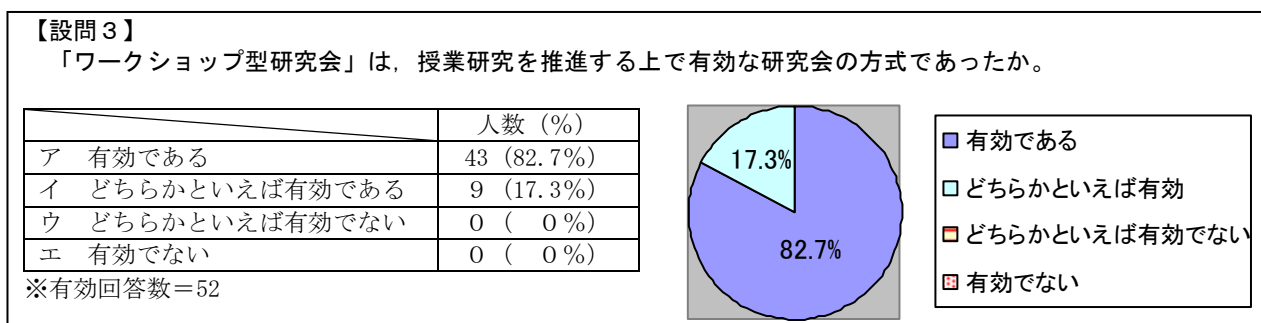
PDCA サイクルで授業力量向上や授業改善に取り組んでいく際、今自分がどのような状況にあるのかということ把握していなければならない。PDCA の C 段階に当たることである。「授業力アップ・ポートフォリオ」の取組をとおしてリフレクションし、次なる目標に向かい取り組む内容や方法を模索していくことはその段階に該当し、意味あることだと考える。ポートフォリオに蓄積される内容は、校内研究テーマにかかわることでなくてもそれ以外のことでよい。

研究会で同僚の授業から学んだことを自分のものにしようとしたとき、効果的なのは学んだ内容について自分の実践に取り入れて実際に行ってみることだと考える。自分で行って、うまくいくかどうかは分からない。教師一人一人にはそれぞれの特性や授業力量があるので、学びを自分のものにするためには、自分なりの試行錯誤・リフレクションが欠かせない。その過程が「授業力アップ・ポートフォリオ」の取組である。

資料の蓄積・整理の仕方、シェアリングの仕方については、さまざまな方法があり、個人や学校の実態等に合わせながら工夫する必要がある。

ウ ワークショップ型研究会の有効性について

【図4】は、ワークショップ型研究会の有効性について、その調査結果をまとめたものである。



【図4】ワークショップ型研究会の有効性についての回答状況

ワークショップ型研究会の有効性については、全員がプラス回答をしている。プラス回答の自由記述から主なものを挙げる。

- 今までよりも、自分が発言する機会、他の先生の発言を聞くことが増え、考えがより深まった
- 授業を見る力がついてきた
- 従来の方法だと、発言が一部の人に偏り、授業の見方が狭いま研究を終えることが多々あった。ワークショップ型研究会だと、全員に発言の機会があり、そのため授業を広く見ることができる
- 成果と課題が明確になる（視覚的にも）
- 全体の中では聞きにくい小さな疑問もワークショップの中で納得したり理解したりすることができた
- これまで以上に自分の意見をしっかりとって研究会に臨もうという意識が高まった
- 短時間で共通理解が図られる
- 事前研でのワークショップ型研究会も大変有効で、一人一人が教材理解を深めるとともに、部員で共通理解して教材解釈をすることができた
- 自分の担当教科以外の研究会にも、積極的に話し合いに参加できた

これまでの研究会の課題の一つに、発言が社交辞令や感想に終始したり、発言者が一部に偏ったりするということがあった。ワークショップ型研究会では、参加者一人一人が自分の考えをもち寄り、小グループで協議することにより、主体的な研究会参加・活発な協議が可能になる。また、ワークシートの工夫等により、協議が焦点化され、成果と課題を明確にすることができる。これは、小・中学校、高等学校といった校種や、学校規模にかかわらないワークショップ型研究会のよさである。

課題として記述されているものは以下のとおりである。

- 授業者の思い・考えが届き難い
- 自分が疑問に思っていた点や聞きたい指導法などについては、思うように聞けない部分があるのではないか
- 話し合いが平板になっているような気もする
- 少数派の考えが取り入れられないことがある

これらの課題に対応するためには、次のようなことをワークショップ型研究会において留意するとよいと思われる。

- ・授業者はグループ協議の際、グループを渡り歩きながら適宜協議の中に入るようにする
- ・付箋紙をグループ化したり、付箋紙のグループ同士の関係を考えたりする際、結論を急がずに

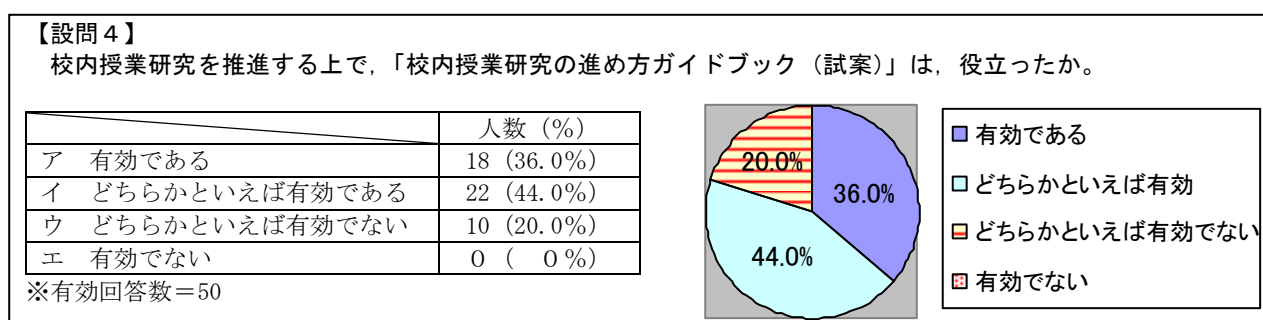
付箋紙の内容についての話し合いを重視するようにする

- ・ファシリテーターは「聞き役」「促し役」ということを自覚し、参加者の考えを吸い上げるようにする
- ・話し合いでは、結論を一つと決め付けず、複数の考え方がある場合にはそれらも位置付けるようにする

授業研究を充実させるためには、学校種や規模、研究会の目的、ワークショップ型研究会の経験数等により、グループの数や構成、ワークシートの様式、研究会にける時間等を変化・工夫させながら、自校に合ったワークショップ型研究会の在り方を探っていく必要がある。

エ ガイドブックの有効性及び改善点について

【図5】は、ガイドブックの有効性について、その調査結果をまとめたものである。



【図5】ガイドブックの有効性についての回答状況

ガイドブック（試案）の有効性について、プラス回答をしている教員は80.0%である。プラス回答の自由記述から主なものを挙げる。

- 必要なときに必要な観点や内容を活用できる資料である
- 細かい所まで書いている。ここから取捨選択するのであるから、さらに細かくてもよい
- シートの実物がある
- 研究を進める上で、基本的な流れを確認することができた
- 具体例が示されており、実践に結びつける手立てが分かりやすくまとめられていた
- 場面ごとのポイントがきちんと示されていて読み易い
- 授業研究では進め方など悩んでいたが、一つの方法・方向性を示していただき参考にさせていただいた
- 学校としての研究の進め方だけでなく、個人の授業力を上げる方法等について知ることができた

課題として記述されているものは以下のとおりである。

- 冊子に目を通す暇がなかった
- 「小学校用」「中学校用」「高校用」と段階別に内容に違いを持たせてはいかかがか
- 校内の実践と対応したときには役立つが、すべてが役立つとは言えない
- よく読んでいない
- 対象が、研究主任や部会リーダー用なのか、学級担任用なのかが分かりづらい

また、設問5の「ガイドブックに修正・改善を加えたほうがよいと思うことは何か」という問いに対しては以下のような記述があった。

- ◆コンパクトにすると活用しやすい
- ◆「簡略版」「詳細版」のようにすればよい
- ◆何で困っているとき、どの項目を読めばいいのか書いてあるとよい

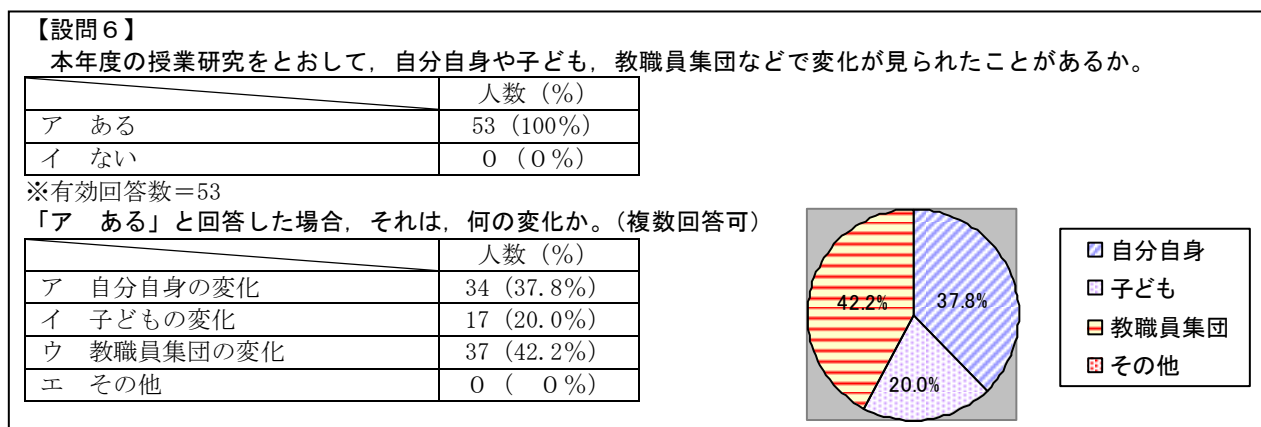
- ◆センターのホームページに、ワークショップ型研究会の様子が解説つきでビデオモジュールと言う形で紹介されているとよいのではないか
- ◆段階をおったステップがあってもよい(たとえば、ワークショップ型研究会初期段階の在り方、中期段階、後期など)
- ◆見やすさ(一目でポイントがわかる)がもう少し工夫されるとよい
- ◆授業場面をイメージした具体的な言葉が入るとよい

本研究において提示したガイドブック(試案)は、小・中学校及び高等学校のすべての教員を対象に、授業研究の進め方や1単位時間の授業づくりについてふれている。当然のことであるが内容は一例であり、取捨選択して活用してもらえばよい。しかし、活用面で課題が出されていることから、活用方法についてガイドブックの中に盛り込んでいく必要がある。

また、「技術的実践と反省的実践の二つの視点からの研究推進」「学校全体と教師個人の二つの側面からの研究推進」という本研究の主な提案や、そのための手段としての「ワークショップ型研究会」「授業力アップ・ポートフォリオの取組」等について、強調できるようにガイドブックを修正・改善していく必要がある。

オ 授業研究による変容の対象及びその内容について

【図6】は、授業研究による変容の対象及びその内容について、調査結果をまとめたものである。



【図6】授業研究による変容の対象及びその内容についての回答状況

全員が本年度取り組んだ授業研究によりなんらかの変容が見られたと回答している。変容の対象で1番回答が多かったものが「教職員集団の変化」で回答数の42.2%を占めた。次が「自分自身の変化」で37.8%、そして「子どもの変化」の20.0%となった。

どのような変化があったのかということについて、具体的な記述の主なものをまとめたものが16頁【表5】である。

教師の授業力量向上・授業改善を図る上では、教師のモチベーションが根底になければならない。アンケート調査を見ると、研究協力校の教師や研究協力員全員が、自分自身や子ども、教職員集団のプラス変容を実感していることが分かる。このような変容の実感が、教師の授業力量向上・授業改善を図る上で欠かせないことである。今後は、このような主観的なとらえを裏付ける客観的データを取っていくことが必要である。具体的には、チェックリストを用いて、同僚同士や、保護者・児童生徒による授業評価を取り入れたり、学力調査の結果を分析・考察したりといったことが考えられよう。また、自校・個人の授業研究の在り方についても検証を加えていく必要がある。

【表 5】授業研究による変容の対象と内容

変容の 対 象	具体的な変容の内容
自分自身	・問題意識を強くもち、研究授業に参加するようになった ・研究会で考えを言いやすくなった ・指導観が明確になった ・同僚の考えを聞く機会が増えた ・授業の組み立て方や授業の見方が深まった ・授業研究に対して主体に取り組むようになった ・以前の研究会には何となく緊張して参加するイメージがあったが、ワークショップ型研究会にはリラックスして参加しているように感じる
子ども	・児童相互、教師と児童が学びを深め合って行く姿が現れてきた ・研究会の手法を生かし、授業にワークショップを取り入れ、子どもの主体的な学びを促している ・算数の授業の高め合いの部分に、新しい試み（学級内ワークショップ）を取り入れたことにより、子どもの発言力が伸びた ・研究成果を生かし、発問や資料の精選をしたことにより、明らかに反応が違う。多様な見方・考え方のできる児童が増えた ・学習意欲が向上した ・安易に回答を探すのではなく、考えて発問に答える姿勢が見られるようになった
教職員集団	・ベテラン中心の研究会だったのが、中堅・若手の活躍も目立つようになった ・研究会の活性化が図られるとともに、成果と課題を共有化できるようになった ・研究内容に深まりが見られるようになった ・共通理解が進み、今後、研究内容の深まり、教師自身の変化、ひいては子どもに力をつけることにつながると思う ・コミュニケーションの機会が増えた

4 「校内授業研究の進め方ガイドブック」の作成

(1) ガイドブック（試案）修正・改善の視点

アンケート調査の分析と考察、及び研究協力校や研究協力員の実践を受け、以下の点をガイドブック（試案）修正・改善の視点としておさえた。

ア 「技術的实践」と「反省的实践」の二つの視点による研究推進の面から

- ・「技術的实践」や「反省的实践」の意味について、より分かりやすく記述すること
- ・「技術的实践」と「反省的实践」の二つの視点から研究推進していくよさについて、より分かりやすく記述すること

イ 「学校全体」と「教師個人」の二つの側面による研究推進の面から

- ・「学校全体」と「教師個人」の二つの側面から研究推進していくよさについて、より分かりやすく記述すること
- ・「授業力アップ・ポートフォリオ」の具体例を示すこと
- ・「授業力アップ・ポートフォリオ」を持ち寄ったシェアリングの行い方を示すこと

ウ ワークショップ型研究会の行い方の面から

- ・以下の解説を付け加えること
 - 「研究会のゴールを参加者全員で共通理解する」
 - 「研究会で取り上げることでできなかった事項については、いつ・どのようなメンバーで・どのような方法等で協議していくのかを確認する」
- ・グループ協議を行なう上での留意点を示すこと

エ ガイドブックの構成の面から

- ・ガイドブックの活用の仕方を示すこと

(2) 「校内授業研究の進め方ガイドブック」の作成

前記(1)のア～エの視点により、本研究第1年次で示したガイドブック（試案）を修正・改善したものが、「校内授業研究の進め方ガイドブック」（別冊資料参照）である。

5 授業改善を図るための校内授業研究の進め方に関する研究のまとめ

ここでは、本研究で作成した「校内授業研究の進め方ガイドブック（試案）」に示した手だてに基づいた実践、及び実践にかかわるアンケート調査の分析・考察から明らかになったことをまとめる。

(1) ワークショップ型研究会の実践から

本研究で取り入れたワークショップ型研究会は、参加者一人一人が主体的に協議に参加し、「技術的实践」と「反省的实践」の二つの視点からそれぞれの成果と課題を明らかにすることをねらいとして行ったものである。そのために、使用する付箋紙の色やワークシートの様式等を工夫して実践を行った。

研究協力校・研究協力員による実践の考察、及びアンケート調査の分析・考察からその有効性が示唆されるが、具体的に明らかになったことを次の7点にまとめる。

- ①参加者一人一人が、自分は主体的に研究会に参加できたという意識をもてること
- ②多様な考えを出し合うことで授業の見方を広げることができること
- ③焦点化した協議にするためには、授業を参観する前に「授業を見る視点」などの資料を配布しておくことや、協議の中の「授業者から」で「技術的实践」と「反省的实践」の二つの視点から振り返りを述べ、協議の内容を参加者全員が共通理解しておくことが重要であること
- ④参加者が協議内容に充実感をもつためには、何についてどこまで協議するのかという研究会のゴール像を明確にしておく必要があること
- ⑤授業提供者も適宜グループ協議に入ること、授業提供者が抱えている課題の解決が図られるということ
- ⑥「感想カード」等を用いて、研究会での学びを明日以降の各自の実践にどういかしていくかということを明確にすることで、研究授業と日常実践が結び付いていくということ
- ⑦「技術的实践」と「反省的实践」の二つの視点から実践を積み重ねていくことにより、教師の授業力量向上・授業改善が図られていくということ

(2) 「授業力アップ・ポートフォリオ」の取組から

本研究で取り入れた「授業力アップ・ポートフォリオ」の取組とは、教師一人一人が日々の実践で取りためた資料等をポートフォリオし、それを基に自分でリフレクションしたり、同僚とシェアリングしたりすることにより、授業力量向上や授業改善を図ることをねらいとして行ったものである。

研究協力校による実践の考察、及びアンケート調査の分析・考察からその有効性が示唆されるが、具体的に明らかになったことを次の5点にまとめる。

- ①ポートフォリオを作成することで、自分のよさや課題を捉えることができ、自己把握につながる
- ②自己課題をもつことで、日々の実践の目的意識が強くなるということ
- ③研究会と日常の実践をつなぐものとしての意味をもつということ
- ④ポートフォリオのシェアリングにより、同僚から指導法や指導観、研修方法等の学びが促されるということ

⑤多忙観を抱いている教師が多いことから、ポートフォリオの整理やシェアリングの機会を学校として意図的に位置付けると有効であるということ

研究協力校・研究協力員による主な実践は、「校内授業研究の進め方ガイドブック（試案）」の内容の一部であるワークショップ型研究会と「授業力アップ・ポートフォリオ」の取組についてである。校内授業研究の推進にガイドブック（試案）を活用することによって、授業力量向上や授業改善が図られるという見通しをもつことができた。今後は他の内容についても、実践をとおして検討を加えていく必要がある。

VI 研究のまとめ

本研究は、「校内授業研究の進め方ガイドブック」の作成と活用をとおして、教員が授業の評価・分析を協力しながら行う校内授業研究の進め方について明らかにし、授業改善に役立てようとしたものであった。

第1年次では、「技術的实践」と「反省的实践」の二つの視点、及び学校全体と教師個人の二つの側面による授業研究推進の必要性、校内授業研究において取り上げる内容等、授業改善を図るための校内授業研究の進め方についての基本的な考え方を明らかにした。そして基本的な考え方をもとに「校内授業研究の進め方ガイドブック（試案）」を作成した。

第2年次では、研究協力校・研究協力員における「校内授業研究の進め方ガイドブック（試案）」を活用した実践、及びアンケート調査の分析・考察を行い、基本的な考え方の有効性を検討するとともにガイドブック（試案）の修正・改善点を洗い出し、「校内授業研究の進め方ガイドブック」を作成した。

ここで2年間の研究の成果と課題についてまとめる。

1 研究の成果

(1) 授業改善を図るための校内授業研究の進め方に関する基本的な考え方についての検討

先行研究や文献等を参考に、授業研究推進の視点、そしてその具体的な手立て等、授業改善を図るための校内授業研究の進め方に関する基本的な考え方についてまとめることができた。

(2) 「校内授業研究の進め方ガイドブック（試案）」の作成

基本的な考え方をもとに、「校内授業研究の推進計画の立案」「授業構想の仕方」「校内授業研究会の進め方」「校内授業研究のまとめ方」「資料編」からなる「校内授業研究の進め方ガイドブック（試案）」を作成することができた。

(3) 「校内授業研究の進め方ガイドブック（試案）」を活用した実践とそれに関するアンケート調査の分析・考察

研究協力校・研究協力員の実践やアンケート調査の分析・考察から、本研究の基本的な考え方を盛り込んだ「校内授業研究の進め方ガイドブック（試案）」の活用が、授業力量向上・授業改善を図るための校内授業研究を推進する上で有効であるという見通しをもつことができた。また、ガイドブック（試案）の修正・改善点を洗い出すことができた。

(4) 「校内授業研究の進め方ガイドブック」の作成

以下の四つの視点からガイドブック（試案）を修正・改善し、「校内授業研究の進め方ガイドブック」を作成することができた。

①「技術的实践」と「反省的实践」の二つの視点による研究推進の面から

②「学校全体」と「教師個人」の二つの側面による研究推進の面から

③ワークショップ型研究会の行い方の面から

④ガイドブックの構成の面から

(5) 授業改善を図るための校内授業研究の進め方に関するまとめ

ガイドブック（試案）に示した手だてに基づいた研究協力校・研究協力員における実践，及びアンケート調査の分析・考察から，明らかになったことをまとめ，校内授業研究の推進にガイドブック（試案）を活用することによって授業力量向上や授業改善が図られるという見通しをもつことができた。

2 今後の課題

本研究においては，ガイドブック（試案）の内容の一部の実践にとどまっていることから，今後，他の内容についても実践をととして有効性を検討していかなければならない。また，授業力量向上・授業改善を図るためには，教師一人一人のモチベーションが重要な意味をもってくると思われることから，授業力量向上・授業改善を図るための方策とモチベーションとのかかわりについて探っていく必要がある。

＜おわりに＞

この研究を進めるに当たり，ご協力いただいた研究協力校の校長先生をはじめとする諸先生方に心からお礼を申し上げます。また，研究協力員としてご協力いただきました先生方に感謝申し上げます。

【引用文献】

稲垣忠彦・佐藤学（1996），『子どもと教育 授業研究入門』，岩波書店，p. 86，p. 116

【参考文献】

伊藤功一（1990），『教師が変わる 授業が変わる 校内研修』，国土社

岩崎奈緒美（2004），『授業改善につながる授業研究をー「教師による授業評価」に焦点を当ててー』，滋賀県総合教育センター

岩手県教育委員会（2006），『授業力ブラッシュアッププラン授業改善シート』

岡山県教育センター（2006），『教育活動の改善に役立つ校内研究の手法に関する一提案』

尾木和英編著（1999），『新版 校内授業研究事典』，ぎょうせい

神奈川県立総合教育センター（2005），『校内研修ハンドブック』

村川雅弘編著（2005），『授業にいかす教師がいきる ワークショップ型研修のすすめ』，ぎょうせい

木原俊行（2004），『授業研究と教師の成長』，日本文教出版

佐藤学（2006），『学校の挑戦 学びの共同体を創る』，小学館

千々布敏弥（2005），『教師の暗黙知の獲得戦略に関する考察』，国立教育政策研究所紀要

千々布敏弥（2005），『日本の教師再生戦略』，教育出版

東京都教育委員会（2004），『東京都公立学校の「授業力」向上に関する検討委員会報告書』

ドナルド・ショーン／佐藤学・秋田喜代美訳（2001），『専門家の智慧 反省的实践家は行為しながら考える』，ゆるみ出版

橋本吉彦・坪田耕三・池田敏和（2003），『Lesson Study 今，なぜ授業研究科かー算数授業の再構築ー』，東洋館出版社

広島県教育委員会（2002），『授業改善のための校内研修ハンドブック』

マイケル・ポランニー／佐藤敬三訳（1980），『暗黙知の次元』，紀伊国屋書店

横浜市教育センター（2005），『授業力向上の鍵ー横浜の新たな授業研究ー』

吉崎静夫（1997），『デザイナーとしての教師 アクターとしての教師』，金子書房